

輝ける女たち

2007(平成19)年6月20日鑑賞<テアトル梅田>

★★★



監督・脚本＝ティエリー・クリファ／出演＝ジェラルド・ランヴァン／カトリーヌ・ドヌーヴ／エマニュエル・ベアール／ミュウミュウ／ジェラルディン・ベラス／ミヒヤエル・コーエン／クロード・ブラッスール／ピエリック・リリュ（ムービーアイエンタテインメント配給／2006年フランス映画／103分）

……キャバレー「青いオウム」のオーナーの自殺。その遺言を聞くために集まった相続人たち。そこから見えてくるさまざまな秘密やウソそして微妙な男女の愛……。そんな人生模様が、華やかなショーと静かに聴かせる歌姫の歌の中、粛々と展開されていく。これぞ人生！ これぞフランス映画！ というテイストをたっぷりとしながら、人生の勉強を……。

これぞ人生！ これぞフランス映画！

この映画は、キャバレー「青いオウム」のオーナーであり女装芸人でもあったガブリエル（クロード・ブラッスール）の死亡（自殺？）を契機として、ニュースに集まってくる「家族」たちの人間模様を描くもの。死亡すれば遺産相続問題が発生し、妻や子供が何をどう相続するかをめぐって生々しい人間模様が展開されることが多いが、この映画もそれ……？

もっとも、この映画が描くのは、私たち弁護士が業務として体験している遺産の分け前をめぐる争いの中にみる人間模様ではなく、思いがけない遺言を聞いた後に展開されていく人間模様の中で、少しずつ明らかになっていく過去の重大な秘密やウソ、誤解さらには思いがけない愛の姿など……。フランス映画には、この手の人生とは？と問いかける映画が多い（？）が、真正面からそれを問いかけたこの映画が、2007年フランス映画祭オープニング作品に選ばれたのは当然……？

いかにもフランス人らしく、登場人物は男女を問わずすべて頑固な（というか自己主張の強い）人物ばかり。そしてそれが、それぞれに魅力的。そんなところに注目し

ながら、これぞ人生！ これぞフランス映画！ という香りをタップリと味わいたいもの。

まずは家族関係の整理を！

2月26日に観た『サン・ジャックへの道』（05年）は、死亡した母親が残した遺言によって、ピエール、クララ、クロードという三人兄妹弟がフランスのル・ピュイからスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラまでの巡礼路を歩くことを余儀なくされる姿（？）を描いた物語だったが、『輝ける女たち』も公証人が、家族同然の人たちを前に発表したガブリエルの遺言からすべての物語が始まっていく。『サン・ジャックへの道』の場合は、子供が3人だけだったから相続人につき何の問題点もなかったが、ガブリエルの場合は、法律上の妻子がないことは明らか。ところが、ガブリエルの相続人（遺贈？）として当然のように集まってきたのは、少年時代からガブリエルを父のように慕い、息子同然のように育ったニッキー（ジェラルム・ランヴァン）とその妻子たち……。

この遺言の法律上の正当性は弁護士の私にも実はよくわからないのだが、この映画を楽しむについては、その点は本質的な問題ではないから横におくとしても、この映画を理解するためにはまずは家族関係を整理しておくことが不可欠。1976年の大ヒットから30年ぶりに製作された『犬神家の一族』（06年）の場合は、松子、竹子、梅子の三姉妹の他、血筋はつながらないが佐兵衛翁の恩人の孫娘野々宮珠世や、女工に産ませた一子青沼静馬が遺産相続に大きく絡んできたため、血で血を洗う争いとなったが、こちらは日本の物語だけに家族関係や人間関係は明確だった。しかしフランス人は、2007年5月6日の大統領選挙で勝利した右派のサルコジ大統領も、妻セシリアは「ファーストレディになりたくない」と発言したり、敗れた左派の社会党の女性候補ロワイヤル氏も、夫のフワンソワ・オランドと離婚（といっても、事実婚の解消）したりと何かとややこしい、というより個人の自由を優先……？

したがって、「青いオウム」で育てられ一世を風靡したマジシャン、ニッキーが普通の家庭をもっている可能性は低く、家族関係はややこしいのでは……？

ニノとマリアンヌは異母兄妹

ガブリエルの遺産について、ニッキーになぜ相続権があるのかはよくわからないが、

公証人が読みあげたガブリエルの遺言は、遺産の本体である「青いオウム」の店や屋敷すべてを、ニッキーを通り越し、その長男のニノ（ミヒヤエル・コーエン）と長女のマリアンヌ（ジェラルディン・ペラス）に遺贈するというものだった。

これを聞いてニッキーはビックリしたが、それ以上にとまどったのがニノとマリアンヌ。なぜなら、ニノはニッキーが既に離婚したアリス（カトリーヌ・ドヌーヴ）との間に生まれた息子で、現在会計士をしており、3カ月に1度、青いオウムの経理帳簿をチェックしていたが、「青いオウム」の経営には全くタッチしていなかったから。またマリアンヌは、ニッキーの幼なじみでマジックの助手をしていたシモーヌ（ミュウミュウ）との間の一夜限りのアバンチュールの情事で生まれた娘だったから……。したがって、マリアンヌはもちろんニノも、ニッキーを父親として素直に認めず、ずっと拒絶していたのだった。

さらに、遺言を聞くためやむをえずやってきた「青いオウム」では、連日華やかなショーが開催されていたが、そこでもニッキーは堂々と人気の歌姫レア・オコナー（エマニュエル・ベアール）とイチャイチャしていたから、それがニッキーの家族たちのカンに触ったのは当然。こんな家族関係と人間関係の中、思いがけない内容の遺言の執行はスナナリと進むのだろうか……？

秘密その1 ガブリエルはなぜ死んだの？

人間は誰しも、人には話せない秘密をもっているもの。そしてそれは、平常時にはそれぞれの胸の中に秘められていても、ガブリエルの死亡とその遺言を受けてニースに集まった関係者たちが相続の処理を続けていると、否応なく少しずつ暴かれていくもの……？ この映画はそんな秘密の暴露と人間性追求のストーリーが面白い……？

「秘密その1」は、ガブリエルはなぜ死んだのかということ。ガブリエルは寒い季節の中、夜中に1人海の中に入っていったのだから、それが海水浴ではなく自殺であることは明らか。わからなかったのがその動機だが、葬式には参加しなかったアリスが子供たちの言い争っているところに登場して明らかにした、ガブリエルの死の真相は……？

秘密その2 その3は？

映画の冒頭、マリアンヌが夫と口論しているのは、養子を迎えたいというマリアン

ヌの主張をめぐる対立。マリアンヌは夫には不妊症だと説明しているようだが、実はそれは真っ赤なウソ！ 子供を産む能力はあるのにそれを自ら封印してしまい、養子を迎えようとするのは、自分の出生を恥ずかしいと思ひ、父親ニッキーの血を自分の代で断とうとしているため……？ ここまで思い詰めているマリアンヌの、父親ニッキーに対する反発と拒絶が強いのは当然。

これが秘密その2だとすれば、その3はニノ。ニノが会計士として数字とにらめっこする生活を選んだのは、マジシャンの父親とは全く違う世界に進みたいという、これも父親への反発から。フランス人もアメリカ人同様、同性愛者が多いよう(?)だが、実はニノにはその傾向があるようで、「青いオウム」を舞台として相続処理が進んでいく中で、ファブリス(ピエリック・リリュ)という若くハンサムな男の子といひ仲に……？ やはり、かなり変わった人生を送った父親ニッキーの子供は、2人も風変わりで、さまざまな秘密を……。

ニッキーの選択は？ 歌姫の秘密は？

「青いオウム」を引き継ぐのは自分しかいないと確信していたニッキーだったから、ガブリエルがそれをニノとマリアンヌに遺贈するとした遺言は、全く意外かつ心外だったはず。私がニッキーから相談を受ければ、その遺言の無効確認訴訟を検討しようとアドバイスすることまちがいなしだが、この映画はそんな生臭い遺産争いをテーマにしたものではない。

そんな目でニッキーの判断を注目していると、さすがフランス人は文明人。ニッキーはあっさりとこの遺言を受け入れ、自分はアメリカに旅立つと宣言したのは立派。さらに、ニノとマリアンヌから自分たちには青いオウムを経営する意思も能力もないから、そのすべてを売却すると言われても、「それはダメだ」と言わないところも立派！ だって私が弁護士として体験している世界では、なかなかこのように理性的かつ合理的にいかないケースが多いのだから……。

そんなニッキーは、最近急接近することができた歌姫レアと一緒にアメリカに行くてくれることを望んでいた。そしてある晩、やっと2人はベッドインを果たすことができたが、そこでレアから聞かされた言葉は想像を絶する意外なもの……？ その秘密をここで暴露するわけにはいかないが、その秘密は「これぞ人生！」という意外なものだから、十分注目を……？

妻たちの秘密は……？

ニッキーと一夜限りのアバンチュールを過ごしたシモーヌは、今「乾杯」という名のワイン専門店を経営しているが、舞台を離れて以降どんな気持でニッキーを見つめていたのかは興味あるところ。そんなシモーヌの心の中に隠されていた秘密が、シモーヌの舞台への復帰話やニノによる帳簿チェックの中、少しずつ明らかになっていく。そしてその決定的発言は、私たちがマジックショーでよく見る「真っ二つの女」の手品箱の中に入ったシモーヌの口から語られるから、それに注目を！

他方、この映画でひととき目立つ存在感を示すカトリーヌ・ドヌーヴ扮する別れた妻アリスも、単にニノの母親というだけの存在ではなく、アッと驚く衝撃の秘密が……。カトリーヌ・ドヌーヴの代表作は何といっても『昼顔』（67年）。昼間は貞淑な人妻が、夜になると高級娼婦としてみせる色っぽい姿には、全世界の男たちがコロリと参ったはず……。当初は「青いオウム」を閉店すると宣言したニノだったが、いろいろと検討を進めていく中、「青いオウム」を引き継いで経営していくという方針に。そんな中、設計図に従って立入禁止とされていた倉庫のカギを開けて入っていくと、そこは何と売春窟。そして、“翡翠のハート”と記されたカーテンを開けると、そこには若き日のアリスの裸体画が……。これこそ、まさにあの『昼顔』で見覚えのあるあの絵……。すると、アリスの若き日、アリスは一体ここで何を……？

人生を歌う数々の歌の説得力は……？

この映画はミュージカル映画ではないが、登場人物たちが示すそれぞれの深刻な人生模様を和らげてくれるのが、時折舞台で披露される裸同然の踊り子たちによる華やかなショー。大阪の北新地にある高級〇〇クラブでも連日華やかなショーが演じられるが、そのレベルは宝塚歌劇や劇団四季には及ばないものの、かなりのもの……。それと同じように「青いオウム」での華やかなショーは、特に私たち中年男性の心を安らげてくれるもの……？

また、それ以上にすばらしいのは、歌姫レアが歌う楽曲の数々。フランスにはシャンソンというジャンルがあり、これはまさに人生を歌うものだが、静かに語りかけるレアの歌はまさにシャンソンと同じで、聴きごたえ十分。さらに、レアだけではなく、アリスやマリアンヌも1曲ずつ見事な歌声を披露してくれるから、これもお見逃しの

ないように……。

今ドキの若者は演歌をバカにしているが、日本の演歌もフランスのシャンソンもその説得力が高いのは、やはり人生をきちんと表現し歌っているため……。

再びそれぞれの道を……

この映画は、もともとバラバラの人生を歩んでいたニッキーの家族たちが、ガブリエルの死亡を契機として集まり、さまざまな秘密やウソ、誤解が語られ、また嫉妬や愛情渦巻く男女関係や人間関係が展開された後、再びそれぞれの道を歩んでいくというもの。ニースにある「青いオウム」に集まり、そこで語られ、そこで展開されたさまざまな出来事は、もちろんいいコトばかりではなく、イヤなコトもたくさんあったはず。しかし、人間は誰もがそんな思いを胸に抱きながら生きていかなければならないもの。そしてそこには、これが正解で、これがまちがいという単純な物差しは存在しないもの。

この映画のエンディングは特別のクライマックスがあるわけでもなく、またアッと驚く結末が待ち受けているわけでもないが、きっと静かに人生とは何かということを、あなたに語りかけてくれるはず。

日本人とフランス人の相違点を正確に分析しつつ、たまにはこういう映画を観て人生論を学び考えるのもいいのでは……？

2007(平成19)年6月21日記